

高齢の母と娘のコミュニケーション (3) — グライスの「質の行動指針」に焦点を当てて —

田中 典子

要旨

筆者は田中 (2013) において、母と娘との電話での会話データを分析し、高齢になった母の、自立していたい気持ちと依存しなければならない現実との間での葛藤を考察した。さらに田中 (2014) では、Searle(1979)[1975]の発話行為論を基に、データ (2011 年 10 月 1 日～12 月 31 日) に表れる「感謝表現」に焦点を当て、そこからどのような関係性が見られるかを分析し、この発話行為に見られる関係の非対称性を指摘した。

本稿では、それに続く 2012 年 1 月 1 日から、同年 3 月 31 日までのデータを用い、Grice (1975) の 4 つの行動指針 (量、質、関係、様態) の観点から会話を分析する。とりわけ、認知症を持つ人がコミュニケーション上の問題を起こしやすいと考えられる「質の行動指針」について詳細に検討する。

Communication between an Elderly Mother and her Daughter (3): Focusing on Grice's 'Maxim of Quality'

TANAKA Noriko

Abstract

Tanaka (2013) examined telephone conversations between a mother and her daughter, and considered the elderly mother's conflict between independence and dependence. Then, based on Speech Acts theory by Searle (1979)[1975], Tanaka (2014) focused on 'thanking' and analyzed what kind of relationship was revealed by the speech act in their conversations (from 1 October to 31 December, 2011).

This paper employs the conversations between the same participants from 1 January 2012 to 31 March. The analytical foci are Grice's four Maxims: Quantity, Quality, Relation and Manner. In particular, the Maxim of Quality is explored, which is likely to cause communication problems to people with dementia.

はじめに

筆者は、田中 (2013) において、高齢になった母と娘との関係性の変化に焦点をあて、自らが提案した役割考察のための枠組み (Tanaka 2001) に基づいて電話での会話 (2004 年 9 月 28 日、2011 年 9 月 6 日～30 日) を調べた。さらに、田中 (2014) では、それに続く、3 ヶ月間 (2011 年 10 月 1 日～12 月 31 日) の電話による会話をデータとし、「感謝する」(thanking) という発話行為からどのような関係性が見えるかを考察した。

本論では、次の3ヵ月間(2012年1月1日～3月31日)の同参与者による電話での会話を用い、分析の枠組みとして Grice(1975)の4つの行動指針(Maxim)¹を基にし、とりわけ認知症を持つ人にとって問題になりやすいと考えられる「質の行動指針」(Maxim of Quality)に焦点を当てて考察する。

1. 分析の枠組み — グライスの行動指針 —

Grice(1975)は、人が会話する際、守ることを期待されている一般原則について、以下のように述べている。

We might then formulate a rough general principle which participants will be expected (*ceteris paribus*) to observe, namely: Make your conversational contribution such as is required, at the stage at which it occurs, by the accepted purpose or direction of the talk exchange in which you are engaged. One might label this the COOPERATIVE PRINCIPLE.

[私たちは、参与者が(特別な事情がない限り)守ることを期待されているおおまかな一般原則を立てることができるだろう。つまり、自分が参加している会話のやりとりの中で受け入れられている目的や方向性に沿って、その時に応じて、当を得た発言をせよ、というものであり、これを「協調の原則」と名付けることができるだろう。]

(Grice 1975: 45 和訳は筆者による)

この「協調の原則」を前提に、Grice (1975)はさらに、人が会話のやりとりの中で、特別な事情がない限り従うであろう「行動指針」(Maxim)を4つ提案し、それぞれを以下のように説明している。

「量の行動指針」(Maxim of Quantity)

1. Make your contribution as informative as is required (for the current purposes of the exchange).
2. Do not make your contribution more informative than is required.

[1. (やりとりのその局面での目的に沿って) 求められている情報を与えよ。

2. 求められている以上の情報は与えるな。]

1 Maximの訳語としては、「マキシム」「格率」「原則」など、さまざまなものがあるが、ここでは、筆者らがThomas(1995)の翻訳にあたって用いた「行動指針」を採用する。

「質の行動指針」(Maxim of Quality)

‘Try to make your contribution one that is true’– and two more specific maxims:

1. Do not say what you believe to be false.
2. Do not say that for which you lack adequate evidence.

[真実であることを言うようにせよ。さらに 2 つの特定の行動指針は、

1. 真実でないと思っていることは言うな。
2. 十分な証拠がないことは言うな。]

「関係の行動指針」(Maxim of Relation)

‘Be relevant.’

[関連のあることを言え。]

「様式の行動指針」(Maxim of Manner)

‘Be perspicuous’– and various maxims such as:

1. Avoid obscurity of expression.
2. Avoid ambiguity.
3. Be brief (avoid unnecessary prolixity).
4. Be orderly.

[分かりやすい言い方をせよ。そして、多様な行動指針として、

1. 不明瞭な言い方を避けよ。
2. 多義的な言い方を避けよ。
3. 簡潔に (余計な言葉を避けよ)。
4. 整然と。]

(Grice 1975: 45-46 より抜粋 和訳は筆者による)

これらの大前提となる「協調の原則」の説明で用いられた ‘*ceteris paribus*’ という言葉が示すように、Grice はこれを「何か特別な事情がない限り」人が従うであろう一般原則として述べているのであるが、高齢者、とりわけ「認知症を持つ人」は、その「特別な事情」を抱えていると考えることもできる。

また Thomas (1995) は、グライスの行動指針を守らない場合のひとつとして「遵守不能」(*infringing*)² をあげ、以下のように説明している。

2 ‘*infringing*’ という語は、一般には「違反」「侵害」などと訳され、特に「順守不能」という意味はないが、行動指針を守らないほかの場合としてあげられている ‘*flouting*’, ‘*violating*’, ‘*opting out*’, ‘*suspending*’ (Thomas 1995: 64) と区別するため、この訳語を用いた。

A speaker who, with no intention of generating an implicature and with no intention of deceiving, fails to observe a maxim is said to 'infringe' the maxim. In other words, the non-observance stems from imperfect linguistic performance rather than from any desire on the part of the speakers to generate a conversational implicature. This type of non-observance could occur because the speaker has an imperfect command of the language (a young child or a foreign learner), because the speaker's performance is impaired in some way (nervousness, drunkenness, excitement), because of some cognitive impairment, (. . .)

[何かを含意したり相手を騙そうとしたりする意図はなく、話し手が行動指針から逸脱することを「遵守不能」という。つまり、その逸脱は、話し手が会話の含意を生み出そうとして起こるのではなく、言語運用の不完全さから生じるのである。このタイプの逸脱が起こるのは、(子供や外国人など)話し手がその言語に習熟していない場合、(緊張、泥酔、興奮など)何らかの理由で話し手の言語運用に支障が生じている場合、なんらかの認知的障害による場合 (. . .) などである。]

(Thomas 1995: 74 和訳・下線は筆者による)

認知症を持つ人の場合は、まさにこれに当たる。一般には行動指針からの逸脱は、相手を騙そうとしたり、何らかの含意を生み出そうとしたりして、意図的になされることが多いが、認知症を持つ人の場合には、そのような意図はなく、やむを得ずそうになってしまうのである。しかし、そのことが周囲の人に戸惑いや苛立ちを生じさせることも少なくない。ほぼ15年間、認知症の母を介護したという藤川(2008)は、以下のような体験を述べている。

とにかく、三人の話を聞こうともせず、また自分の話を始めようとする母に、私は苛立って、「自分の話ばかりするのはやめてくれ」と冷たく言い放ちました。考えてみると、三人の話に付いていくことができず、自分から別の話を切り出すしかなかったのでしょうか。そんな母を理解しようともせず、邪魔者にして、三人の話はずみしました。母は黙って、理解できない言葉に頷くふりをして、私たちの話に耳を傾けているしかなかったのだと思います。

(藤川 2008: 25-26)

その場の話題についていくことができず、関係のない「自分の話」をするのは、グライスの「関係の行動指針」からの逸脱だと考えることができる。

また、「同じ話」をくり返すのは、相手にとって既知の情報を与え続けているわけで、真の意味で提供する情報量がなく、「量の行動指針」を逸脱しているとも考えられる。このような話を聞くことは、新しい情報を求めて聞くことに慣れている私たちにとって忍耐を要することである。

このように、認知症を持つ人の会話は、グライスの 4 つの行動指針のいずれかを逸脱することが多いだけでなく、Thomas(1995: 91) も指摘するように、「どの行動指針が発動されているかは常に決められるというわけではなく」(‘It is not always possible to determine which maxim is being invoked’)、それらが共起することも多い。つまり、認知症を持つ人は「相手が求めている以上／以下の」「真実でない」「関連のない」「不明瞭な」話をすることも稀ではないのだ。そして、そのような会話に慣れていない私たちは、認知症を持つ人の話に対し否定的な反応をしがちである。

筆者もまた例外ではなかった。認知症の母の近くにいたのは 2 年足らずであるにもかかわらず、特に母の話が「質の行動指針」(真実であることを言うようにせよ) から逸脱していると考えられる場合、つまり本当だとは思えない場合には、それに対してどのように反応したらよいか分からず、当惑したり苛立ったりすることも多かった。本人はそれを真実だと信じているだけに、説明することも困難であった。ここでは特にデータ中の「質の行動指針」からの逸脱に焦点をあて、それがコミュニケーションにどのような影響を与えたかを考察してみたい。

2. データ

筆者は、母が 2013 年 5 月にグループホームに入所するまで、約 10 年間、ほぼ毎日、電話で母と会話しており、その会話を母の許可³を得て録音し談話分析のデータとして研究に用いてきた。

本論では、田中(2014)で取り上げた会話に続く 2012 年 1 月 1 日から 3 月 31 日までの 3 ヶ月間に録音した電話での会話をデータに用いる。表 1 に詳細を示す。

3. 枠組みの適用

まず、今回対象としたデータ中から、IBM SPSS Text Analytics for Surveys⁴を利用して使用頻度の高い内容語を抽出し、それらの語が用いられている実際の発話データに当たることにより、それぞれの語がどのようなコンテキストの中で用いられていたのかを検討した。その中からグライスの「質の行動指針」からの逸脱(真実でないことを言うこと)による問題が見られるものを抜き出した。さらに全体のテキストを見直し、頻度が高くはなかった語についても、この問題に関連があると考えられるものについては考察対象とした。

3 2003 年 6 月に口頭で許可を得て録音を開始し、その後、2008 年 8 月に、念のため、本人の署名・捺印の形で書面による許可を取った。データ収集のより詳しい経緯は田中(2013)を参照されたい。

4 このソフトは本来、自由回答形式のアンケート結果を分析するために開発されたものであるが、それを会話中のトピック抽出に応用した。

表1. データ

収録日	2012年1月1日～3月31日 自宅の固定電話からの会話のみ録音し、かつ、個人名などが話題に出てその内容が倫理に関わると判断したものは削除したため、分析対象とした収録日は以下の通りである。同日に複数回、会話したのも含む。 1月1、2、3、4、9、10、11、16、17、18、20、21、23、24、25、26、27、29、30、31日 2月2、3、4、6、7、9、10、11、12、14、17、21、22、23、24、25、27、28日 3月1、2、3、4、6、8、10、12、13、16、17、18、19、21、22、26、27、30日	
媒体	電話	
参与者	母 (M)	81歳
	娘 (D)	57歳～58歳 (誕生日を挟む)

3.1 妄想—夢—

Mの認知症は徐々に進行し、2012年初頭には妄想のようなものが見られるようになった。以下は1月9日の電話での会話である。Mは「Dが癌になった」と心配しているが、Dには心当たりがない。つまり、Mは「質の行動指針」の内、「2.十分な証拠がないことは言うな」から逸脱しているとも言える。結局は、「夢」だったのだろうということでMも納得し、この話はそのままになった。

- 11253⁵ D (・・・)⁶ でおかあさん2回も電話してきて私が癌になったとかなんとか
 11254 M うんまたなんか (2s) もうしょうがないとかって言ってきて
 11255 D い言わないよ私そんなこと
 11256 M じゃあ夢かなあ (笑)
 11257 D (笑) 夢だよー、言うわけないじゃんいついつ言ったの?
 11258 M (2s) なんか目覚めたときに□子⁷が
 11259 D (笑) 目覚めたときって
 11260 M (笑)
 11261 D 私が枕元に立って言ったとかそういうこと? (笑) うーん [元気だよ私は]
 11262 M [もうなんか眠れなかった] 一晩中

5 数字は、2011年9月1日の談話から付した通し番号を指す。その他の文字化記号については巻末を参照されたい。

6 (・・・)は、筆者による省略部分を表す。

7 Dの名前。

11263 D うーんそんなこと言われてもねえ(笑) 私一言もそんなこと言った覚えもないし

11264 M (笑) じゃ夢だね

(2012年1月9日)

3.2 妄想?—清掃サービス—

また、Mの妄想なのかどうか分からない出来事もあった。以下は、「Mの家に清掃サービスの人が来た」というものであるが、Dにはそれを頼んだ覚えはない。また、この談話をよく見ると、初めMは清掃サービスの人数を「2人でね」(12363 M)と説明しているが、後になってDの「何人来たの?」(12494 M)という問いには「1人」(12495)と答えており、矛盾がある。この時期、Mに妄想のようなことが時々起ったので、DはMの言うことを半信半疑で聞いている。つまり、Dにとって、この話には十分な根拠がなく、「質の行動指針」からの逸脱だと感じられた。しかし、Mは実際に起こったことだと信じており、「1. 真実でないと思っていることは言うな。」から逸脱しているという意識はない。結局、これがMの妄想なのか、実際にあったことなのかは最後まで分からなかった。

12353 M あのお宅の娘さんから

12354 D うん

12355 M 頼まれたから来たって言うから

12356 D 頼んでないよそれ[詐欺かもしない]

12357 M [あ] だからあたしねまだ自分で全部やりたいから

12358 D うーん

12359 M 来ないでくださいだったのよ

12360 D ああそいつ来たの?

12361 M 昨日

12362 D ふーん

12363 M 2人でね

12364 D あそうなの?

12365 M お掃除(笑) やりますなんて言ってねえ、せっかく来たからねえまあやつてもらったけども今日だけでいいですって言った

12366 D あたし頼んでないよ

(中略)

12411 M うんだからお金払いませんからねって言ってね

12412 D うんそんなこと言ったって後から請求なんか来るかもしないよー

12413 M いやー払わないけど

(中略)

12494 D [何人]何人来たの？

12495 M 1人

12496 D 1人？

12497 M うん

(2012年1月23日)

Mの言うことが本当かどうか分からないことは、Dにとって困惑のもとになった。上のエピソードも、詐欺まがいの商法だとしたら、Mを疑ってかかる方が間違っているかもしれないのである。「認知症の人の言うことは信用できない」という思いがあるため、実は本当のことを言っているのに、認知症の症状なのだと誤解してしまうこともある。竹中(2010)もその例を挙げ、注意を喚起している。

「一緒に暮らしているのは誰か」と問われると「お母さん、お姉ちゃん」と答えて子供時代に逆行したとみなされることがあるが、嫁、孫娘の生活場面での呼称ということも念頭におく。

(竹中 2010: 68)

つまり、鈴木(1973:166)が指摘するように、日本文化では家族内で最年少者の視点に合わせた呼称が用いられることがあり、この場合も、例えば孫の視点に合わせて嫁や娘を「お母さん」と呼んでもおかしくないわけで、この呼称が「子供時代への逆行」によるものとは断定できないのだ。

3.3 混乱一夕食の約束

2011年9月にDがMの家の近くに転居⁸してから、初めは週に一回、後には二、三回程度、夕食を共にしていた。仕事を持つDが都合のつく日に夕食を作り、Mを招くという形を取るが多かった。Mも当初、喜んで誘いに応じていたのだが、2012年になると、約束していたかどうかには混乱が見られるようになった。

以下は、Dが仕事から戻った夜、Mから受けた電話での会話である。Dが夕食の約束を忘れたと言ってMは怒っているが、Dには心当たりがない。以前から研究データとして会話録音をしていることはMも承知していたので、その日の朝、Dが仕事に出かける前の電話での会話を、いわば「証拠」としてMに聞かせたが、あくまでも約束を忘れたのはDだとして「あんた覚えてないんだ」(11455 M)というMの確信が揺らぐことはない。

8 その経緯については、田中(2013)を参照されたい。

つまり、D にとって「質の行動指針」を担保する「十分な証拠」である録音も、M にとっての「真実」を変えることは出来なかったのである。

- 11440 D 私ほんとにね言ってないよー
- 11441 M いやあねえ、忘れちゃってんだよそいじゃ
- 11442 D じゃだってねえ私朝のおかあさんとの会話さあテープにとってあるんだあそれ聞いてみる？
- 11443 M (1s) え聞いてみてごらん [(*****)]
- 11444 D [ちょっと待っててじゃあ] 待ってて
(中略) 【電話でその録音部分を流す】
- 11450 D 聞いた？
- 11451 M (1s) なんか遠くに聞こえたけどはっきり聞こえなかったけど
- 11452 D うん、でも今行ってきまーすって私言ったの聞こえたでしょう？
- 11453 M うん聞こえた
- 11454 D うん、それがこれが朝おかあさんと話したことよ
- 11455 M (2s) じゃああんた覚えてないんだ待っててね待っててねなんにもしないで待っててねって

夕飯を一緒に食べる日は、D が仕事に行かず家に居られる日であり、この日はその曜日ではないことなどを、D は説明し説得を試みるが、M は納得しない。だが、これに続く以下の談話では、D は自分の非は認めないものの、「でもそんなふうに思わせちゃったんだったら悪かったけど」(11518 D) とやや下手に出、M も「そんな悪くないよ」(11519 M) 「別に大したことじゃないけどね」(11521 M) と応じている。それに対し、D は「なんかた食べるものあるの？」(11522 D) と、まだ夕飯をすませていない M を気遣っている。

- 11511 M [待ってて] 待っててって言うから
- 11512 D うん
- 11513 M ずっと待ってた
- 11514 D 私はそう言った覚えはないんだあ
- 11515 M そう？
- 11516 D だって今日仕事行ってるんだから [さあ]
- 11517 M [だから] 不思議だなと思って
- 11518 D うんだから不思議だ私も、ねえでもそんなふうに思わせちゃったんだたら悪かったけど
- 11519 M そんな悪くないよ

- 11520 D もう【おかあさん】
11521 M 【別に】大したことじゃないけどね
11522 D なんかつ食べるものあるの？
11523 M あるよ

しかし、そのような気遣いは続かず、談話の終わりには、Mは空腹のままずっと待たされたことへの不満(11551 M)、Dは帰宅後に急に責められたことへの苛立ち(11552 D)が前面に出てしまう。ついに、Mは食事を別々にしたいと言い出し(11555 M)、それに対しDも距離を感じさせる「デス／マス体」を用いて「うんじゃあそれでもいいですよ」(11556 D)と突き放す。しかし、その後の談話では「私はたまーにおかあさんと食べるのは楽しみだったけど残念だねー」(11558 D)、「じゃ□子のいいように」(11559 M)と、互いに、会食をこれきりにしたくないという思いも滲ませている。

- 11551 M でおなか空いたからお菓子食べたり飴なめたりしてたんだけど
11552 D うーん、だって私今帰ってきたとこなのよ
11553 M だから不思議【だなあとって】
11554 D 【うんだから】だから普通の日は絶対ないよそれ
11555 M うーん、あたしは三度三度自分たちでやったほうがいいと思ってるんだけど
11556 D うんじゃあそれでもいいですよ
11557 M うん
11558 D うん、でも私はたまーにおかあさんと食べるのは楽しみだったけど残念だねー、うんじゃあしょうが【ないから】
11559 M 【じゃ□子の】いいように

(2012年1月11日 夜)

井出ほか(2011)は、介護者が陥りやすい「事実による説得」の問題を指摘している。

「ご飯をたべさせてもらえないだなんて、人間きの悪いこと言わないでください」

(中略)「私が洗っているこのお皿が、今お母さんが食べたお皿ですよ」

私たちは、事実だけで相手を説得してしまいがちです。お母さんは確かにご飯を食べました。それは私たちにとっては事実です。しかし、認知症であるお母さんの文脈では、まだご飯を食べていないのです。それを私たちの事実で説得しようとしても、納得できなければかえって混乱し、憤ることがあります。(中略)事実で説得しないことを意識してかかわっている先には、必ず彼らが納得できるかわり方があります。

そこにしか答えはないのです。

(井出ほか 2011: 56)

3.4 改善のための工夫—「のま子さん」導入—



この出来事から間もなく、会食の日を間違えないようにするため、Dはある対策を考え出した。Mは若いころから手芸が得意で、Dに人形などを作ってやることもよくあったが、その人形のひとつに、次回の会食の曜日や時間を書いたメモを持たせ、Mの目につく所に置いておくことにしたのだ。(写真参照)

この方法はMも気に入り、会食の日を確認するのに役立つことになった。以下の会話が示すように、半月後には、DとMの名前の頭文字を取り、人形に「のま子」と命名し、その後「のまさんの日」とは会食の日を意味するようになった。

- 13000 D あのお人形さんに名前つけてあげようかね (笑)
13001 M そうじゃあ2人で考えようよ
13002 D うん考えようよ今日来たとき (笑)
(中略)
13007 M のま子は?
13008 D え?
13009 M のま子
13010 D のま子?
13011 M □子と○子【Mの名前】
13012 D ああ (笑)
13013 M (笑)
13014 D 面白いね、うんじゃあのま子にしよう

(2012年1月31日)

しかし、この方法でMの心の負担が消えたわけではなかった。ある会食の日、Mを迎えに行ったDが縁側から覗くと、Mが「のま子さん」をしっかりと胸に抱き、メモとカレンダーを見比べて途方に暮れている様子が目に入った。見当識障害が進んできたMにとって、その日が何日か自体がよく分からなかったのだ。

本人の大変さは、まだ介護に慣れていない介護者の想像を超えていることも多い。小澤・土本(2004)は、以下のように指摘する。

もの忘れに対して「水道栓を閉め忘れないこと」とか「電話がかかってきたら必ずメモをとること」とか「煮炊きしているうちは鍋の傍を離れないこと」と書いた張り紙をしておくとい、というような指導がなされることがあります。ですが、このような手だてでうまくいくようなら、よほど痴呆が浅いか、痴呆とは言えない状態なので

(小澤・土本 2004: 78)

認知症の当事者として声をあげたボーデンは、自身の体験を以下のように述べている。

Without a huge effort, I make slip-ups all the time, but ‘normal’ people don’t need this amount of effort just to keep on track.

I’m OK as long as I am really trying hard, I am well rested and not at all tired. Then I could almost pass for normal. But inside me, it feels as if I am clinging to a precipice by my fingernails.

[大変な努力を払わなくては、いつも間違ってしまう。しかし、「正常」な人たちは、ただ常軌を逸しないためだけに、こんなにも多くの努力を要することはない。

一生懸命にやろうと努め、よく休息を取り、少しも疲れていない限り、私は大丈夫だ。その時は、ほとんど正常といっても通るだろう。でも心の中では、まるで爪を立てて絶壁に張り付いているように感じている。]

(Bryden 2012: 70 邦訳：ボーデン 2003:75, 松垣陽子訳)

3.5 作話—カメラ—

そのように大変な思いをしながら、認知症を持つ人はなんとか自らを守ろうとしている。自分で話を作り出す「作話」は、そのような自己防衛から生まれるものなのかもしれない。「作話⁹」について、佐藤(2012)は以下のように述べている。

9 小澤(1998:38)は、「このようなさまざまな病態の、どこまでを妄想とよび、どこからを作話とするのか、さらにどこからは記憶錯誤とよぶべきかは半ば任意であり、概念規定の問題である。」と述べている。

「作り話」が意図してつく嘘であるのに対して、作話は意図せずについでしまう嘘であり、本人にとっては事実です。「嘘¹⁰」が意図してつくものであるとすれば、作話は嘘ではないわけです。

作話には、話のつじつまを合わせるために、記憶の欠落した部分を適当に創ってしまうタイプと、誇大妄想的なタイプとがあります。いずれにしても、作話すること自体に問題はないのですが、それを聞いた人に「嘘をついた」と思われるために、周囲との関係性が悪くなるのが問題です。

(佐藤 2012:171 脚注は筆者による)

Mにもこの時期、つじつま合わせのための「作話」と呼べるような症状が見られた。以下の会話で、Mは、家にカメラがないのはクラス会の時に置いてきたからだと説明している。しかし、Mのクラス会は一年近くも前のことであるばかりでなく、Dは最近そのカメラを見たことがあり、納得できない。するとMは、次回のクラス会のための幹事の「打ち合わせ」の時のことだと説明し直す。

15070 D 大丈夫？

15071 M だいじょぶなんだけどね

15072 D うん

15073 M あたしクラス会のときに写真機持ってって (3s) うちにもないから [全然]

15074 D [こないだなんか] 見たよ

15075 M 今見たらどこにも写真機ないから

15076 D うんクラス会はだって去年の5月だったからさあ

15077 M これからなんだけどね

15078 D うーん、いつあるの？クラス会

15079 M クラス会？ (17s) 4月の18日だけど、4月の18日

15080 D ああそうなの？

15081 M で幹部だけこないだ集まったのよね

15082 D ふーん

(2012年3月17日)

二日後の会話で、Mは、カメラを買おうと思い、スーパーマーケットに電話で問い合わせたところ、売っているというので、買いに行こうと思っていると話す。多分どこかに

10 Weinrich(1966)は、Augustinusの嘘の定義として「嘘とは、いつわりを言う意志をともなった陳述である」をあげている(井口訳p.12)。

仕舞い忘れていたのだらうと思っているDは、買いに行くのを遅らせようという意図もあり「一緒に行かない？」(15470 D)と提案する。

- 15465 M あたしねなんか携帯ラジオがないじゃない？ あ携帯あ写真機
15466 D カメラ？
15467 M うん
15468 D おお
15469 M だからね聞いたのよあのヨーカドーで売ってますかつつたら売ってるって言うから買い買いにいこうと思ってたんだけど
15470 D ああーなんかほら一緒に行かない？もしあれだったら
15471 M ああそうね

(2012年3月19日)

しかし、その二日後には、Mはクラス会の打ち合わせの後、カメラを写真店に置いてきたと再度説明し、「そのカメラ屋さんがうちにも配達してくれると思うよ」(15606 M)と言う。Dは、「お客さんのカメラを全部カメラ屋さんが配達してたらさあ採算取れないよ」(15607D)と理由をあげ、「ちょっとあり得ないと思うんだけど」(15609 D)と主張するが、「でもまあそういうことならば少し待ってみたらどうかねえ」(15609 D)とやや譲歩する。

- 15584 M あのー〇〇【Mの出身校】の打ち合わせのときにあたしは持ってったのよね
15585 D うん
15586 M それで持ってってみんなであのーお茶の水の近所の写真屋さんに
15587 D うん
15588 M 現像焼きつけしてもらいに行ったから多分そっから返ってくると思う
(中略)
15605 D うーん
15606 M きっとそのカメラ屋さんがうちにも配達してくれると思うよ
15607 D でもさあお客さんのカメラを全部カメラ屋さんが配達してたらさあ採算取れないよカメラ屋さん
15608 M そうねえ
15609 D (笑) そうお金かかるんだもん配達するの、特にカメラなんて壊れ物だからさあすごく高いもん配達料、だからさあちょっとあり得ないと思うんだけどでもまあそういうことならば少し待ってみたらどうかねえ

(2012年3月21日)

その後、MがDのマンションを訪れた時、カメラを持っていたので、Dはこの件は解決したと考えていたが、カメラを写真店に置いてきたという「事実」は、Mの意識から消えてはいなかったようだ。上の会話から五日後、Mが再び同様の説明をしたので、Dが「おかあさんこないだカメラ持ってたじゃないうちに来たとき」(15707 D)と指摘すると、Mは「うんあるから」(15708 M)とあっさり認めた。Dは何度も念押しし、「はいじゃあもうそれ解決ね」(15717 D)と強引にこの件を終わりに導いている。

- 15704 M あの〇〇【Mの出身校】の人と会ってあたししかカメラ持ってないけど写して
- 15705 D うん
- 15706 M でカメラ屋さんに置いてきたのよね
- 15707 D おかあさんこないだカメラ持ってたじゃないうちに来たとき
- 15708 M うんあるから
- 15709 D うんあるんでしょ？
- 15710 M うん
- 15711 D だからいいんでしょ？
- 15712 M うん
- 15713 D うんだからもう見つかったんでしょ？
- 15714 M うん
- 15715 D はいじゃあよかったですね
- 15716 M うん
- 15717 D はいじゃあもうそれ解決ね
- 15718 M 解決
- 15719 D はいはい大丈夫です
- 15720 M はい
- 15721 D わかりましたはいじゃあねー

(2012年3月26日)

Mがこれで本当に納得したとは思えない。しかし、この後、障害を持つMのもう一人の娘(Dの妹)が、春休みで施設から帰省してくるという大きな出来事があり、Mの意識は自然にそちらに向かったようであった。

おわりに

本稿では、2012年1月1日から3月30日までの3ヵ月間の会話をデータとし、主にグライスの「質の行動指針」からの逸脱による問題に焦点をあて、その内容を考察した。

考察の結果、改めて分かることは、認知症を患っている本人にとっては、「質の行動指針」から逸脱している、つまり、「真実でないことを言っている」という意識はなく、「事実」だと思っていることを言っているにすぎないのだということである。その時々で言うことが変わってくる場合でも、その時点ではそう信じているのであろうし、「作話」の場合にも、話を作っているつもりはないのであろう。確信を持ってそのように言っている場合もあれば、周囲で起こる出来事をうまく把握できず、それを取り繕うため「作話」を重ねてしまう場合もあるようだ。いずれにせよ、周囲の人には「真実でないことを言っている」と捉えられ、不信感や苛立ちを生んでしまうことも少なくないだろう。

しかし、ここで「人は何のために話すのか」ということを、再度考えてみたい。本稿の枠組みとして用いた「グライスの行動指針」は、人が言葉を発する主目的を情報伝達と考えており、だからこそ「質の行動指針」では「真実であること」が問われるのである。だが、人が言葉を交わす目的はそれだけではない。Malinowski (1966: 315)[1923] が「交話」(phatic communion) と呼んだ「ただ言葉を交わすことによって絆が生み出されるようなタイプの話」(a type of speech in which ties of union are created by a mere exchange of words) もあり、挨拶やスモール・トークなどがその典型と見なされる。

竹中 (2010) が描写するアルツハイマー病の人同士の「仮の対話」(pseudo-dialog) は、まさに「言葉を交わすことによる絆の形成」とも感じられる。

アルツハイマー病の患者が、部屋やベンチで相手をうったりうなずいたりしながら親しげに会話している場面に近づいて耳を傾けると、互いにまったく無関係な話や言語崩壊したジャルゴン失語的な独語をあたかも相手に応えるかのように語らっている。

(中略)

このアルツハイマー病にみられる特異な行動は、人間関係からとり残された者同士が、親密な人間関係をもとうとする姿かもしれない。親密にもかかわらず相手がだれか、どういう関係かについて尋ねてもほとんどの場合はまともな答えはえられない。

(竹中 2010:75)

認知症を持つ人にとっては、誰かと言葉を交わすことにこそ意味があるのかもしれない。私たちも認知症の人との関わりで何が大切かを改めて考えてみる必要があるだろう。藤川 (2012) が紹介する以下のエピソードは、そのヒントになるのではないだろうか。

先日、友人からこんな話を聞きました。認知症のおばあちゃんのいる家庭でのこと。おばあちゃんは、毎回同じ話をします。おばあちゃんが、また同じ話をしようとしたとき、他の家族はあきれ顔で、母に対する私と同じようにおばあちゃんを無視して話を進めようとしていました。そのとき孫が「おばあちゃんの話は何度聞いてもおもしろい」と言ったのです。それを聞いたおばあちゃんは、安心したような顔をしていました。「母さんの話は何度聞いてもおもしろい」と私が母に言えていたなら、母はどれだけ救われていただろうかと、今更ではありますが思います。

(藤川 2012: 148-149)

謝辞

この拙論を書くことを可能にしてくれた亡き母に感謝したい。

文字化記号

M, D 参加者

、 短い音の区切り（音が区切れていない場合には、読点是用いない。文の終わりにも句点是用いない。）

(s) ポーズ。長いポーズについては(2s)のように、おおよその秒数で示す。

? 音の上昇。音が上がるときには、疑問文でなくても?をつける。

— 長音。「うーん」「えーと」など。但し、yesを表す「ええ」、noを表す「ううん」など、単なる長音でないと思われる場合には、字を重ねる。

[オーバーラップの始まり

] オーバーラップの終わり

(**) 聴き取り不可能な音

(笑) 発話と同時、または発話に挟まれている「笑い」

参考文献・資料

井出訓ほか(2011)『認知症の人のサポートブック』NPO 法人認知症フレンドシップクラブ編、中央法規。

小澤勲(1998)『痴呆老人からみた世界』岩崎学術出版社。

小澤勲・土本亜理子(2004)『物語としての痴呆ケア』三輪書店。

佐藤眞一(2012)『認知症「不可解な行動」には理由(ワケ)がある』ソフトバンク新書。

鈴木孝夫(1973)『ことばと文化』岩波新書。

竹中星郎(2010)『老いの心と臨床』みすず書房。

田中典子(2013)高齢の母と娘のコミュニケーションー自立と依存との葛藤の中でー『清泉女子大学

紀要』第61号93-108.

---(2014). 高齢の母と娘のコミュニケーション (2) — 「感謝表現」に見られる関係の非対称性 — 『清泉女子大学紀要』第62号57-73.

藤川幸之助 (2008). 『満月の夜、母を施設に置いて』中央法規.

--- (2012). 『手をつないで見上げた空は — 認知症の母からの贈り物』ポプラ社.

Bryden, C. (2012)[1998]. *Who will I be when I Die?* London: Jessica Kingsley Publishers. [邦訳: ボーデン, クリスティーン (2003) 『私は誰になっていくの? — アルツハイマー病者からみた世界』松垣陽子訳 クリエイトかもがわ]

Grice, P. (1975). 'Logic and Conversation', in P. Cole and J.L. Morgan (eds.) *Syntax and Semantics. Vol.3*, Academic Press. [邦訳: グライス, ポール (1998). 『論理と会話』清塚邦彦訳、勁草書房]

Malinowski, B. (1966) [1923]. The problem of meaning in primitive languages. Supplement to C.K.Ogden and I.A.Richards, *The Meaning of Meaning*. London: Routledge and Kegan Paul. 296-336.[邦訳: マリノフスキー, プロニスロー (1923) 「原始言語における意味の問題」C. オグデン, I. リチャーズ (1967) [1923] 『『意味の意味』への補遺 I』石橋幸太郎訳、叢書名著の復興、新泉社]

Searle, J. (1979)[1975]. 'A taxonomy of illocutionary acts' in *Expression and Meaning*. Cambridge: Cambridge University Press. 1-29.

Tanaka, N. (2001). *The Pragmatics of Uncertainty: its realisation and interpretation in English and Japanese*. 春風社.

Thomas, J. (1995). *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. London: Longman.

[邦訳: トマス、ジェニー (1998) 『語用論入門 — 話し手と聞き手の相互交渉が生み出す意味』浅羽亮一監修、田中典子・津留崎毅・鶴田庸子・成瀬真理訳、研究社]

Weinrich, H. (1966). *Linguistik der Luge*. Heidelberg: Lambert Shneider. [邦訳: ヴァインリヒ、ハラルト (1973) 『うその言語学 — 言語は思考をかくす事ができるか』井口省吾訳注、大修館書店]